

鬼つ子「右横書き」とその時代

屋名池誠
Yanaike Makoto

漢字・カタカナ・ひらがなといった独自の書字文化をもつ日本。

本来、日本語は「縦書き」に適したものとして発展を遂げてきたが、江戸後期には「横書き」というまったく異質な書字文化に遭遇する。

現在の「左横書き」が主流の時代となるまでに、反発と模倣。さまざまな試行錯誤があつた事実は、あまり知られていない。

だが、そのユニークな遭遇史は、異質なものとの出会いを新たな創造につなげる文化的プロセスの良き見本として、現代にも役立たせることができるのでないだろうか。

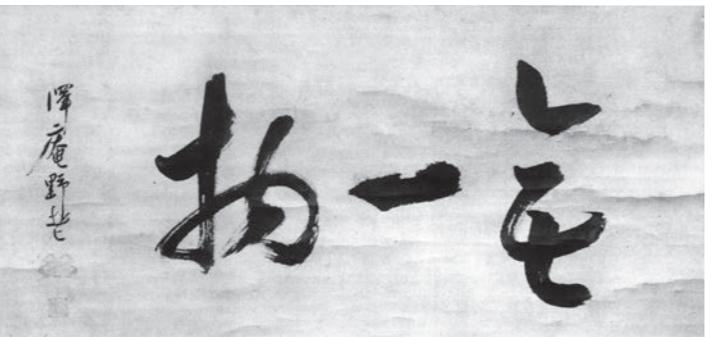
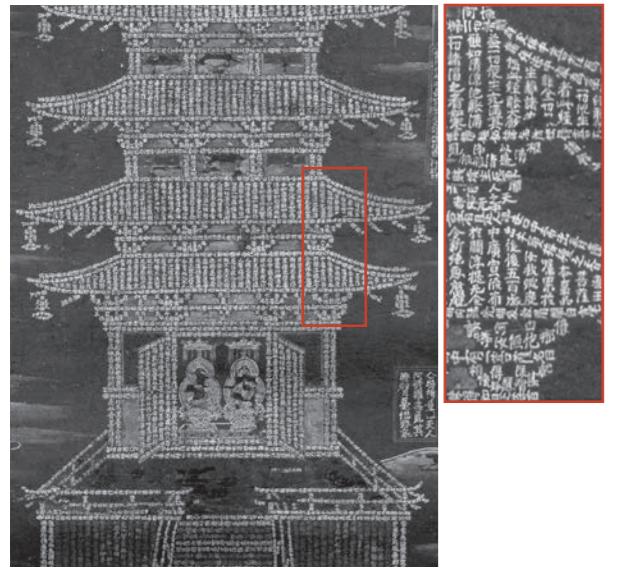


図1：禪僧沢庵の筆

禪僧である沢庵宗彭（たくあんそうほう）筆による横長扁額。「無一物（むいちもつ）」と右から横書きで書かれているように見えるが、実は一行一字の縦書きである。

図2：『法華経宝塔曼荼羅図』

法華経の経文で塔を描いているが、縦の線は縦書きで書かれ、横の線は90度文字を倒して縦書きされている。所蔵／長栄山妙法寺（堺市博物館）

日本語を使うわれわれにとって、文字を縦書きに使うことは、ごく当たり前のことにすぎない。しかし、縦書きする英語などというものがない（縦長の看板などに見られる一見縦書きのよう見えるものは、一行一字の横書きである）ことからもわかるように、世界的にはこうした自由のきく言語はきわめて稀なのである。

実は日本語が縦書き・横書き両用になつたのも、わずかここ百数十年のことすぎない。日本語は古来縦書き専用だったのだが、左から書いていく横書き（以下、「左横書き」とよぶ）を使う歐米の言語との出会いによって、横書きという新しい様式をもつに至つたのである（日本語同様に現在縦書き・横書きどちらもできる中国語や朝鮮語も、もともとは

縦書き専用で、近代の日本語の事例に触発されて横書きが始まったものである）。

こういうと、「いや右から書いてゆく横書きなら昔からあつたのではないか」と思う人も多いのではなかろうか。欄間の扁額などによく見られる、図1のような書き方である。図1は江戸時代初期の禅僧沢庵の筆になるもので、右から「無一物」と書かれている。実はこれは横書きではなく、一行一字の縦書きなのである。紙の幅いっぱいに大きな文字が書かれているので、縦書きの一行に一字しか入らず、左へ進むのは行が移ってゆくからのである。字が小さく書かれて、縦方向にも二字以上文字を入れる余裕があれば縦書きされることは、図1の左端の署名に見られる通りである。

こうした例が、横書きではなく、確かに「一行一字」の縦書きであることは次のようない点からも知ることができる。図1のようなくずし字は、当時つくづけ書き（「連綿」という）されるのが普通だつたが、連綿は行の内部でだけ起き、行をこえて前の行末と次の行頭が連綿していなければ、1がくずし字でありながら連綿していなければ、隣り合う文字がそれぞれ別の行に属しているからである。また、「々」のような繰り返し記号は、江戸時代には行の頭には置いてはいけないことをつけていた（いわゆる「行頭禁則」である）。図1のように水平方向に一字ずつ並んでいる書では、同じ文字が続く場合も同じ字が繰り返して書かれ、決して「々」はもちいられないのだが、これもそれぞれの字が別の行の先頭だからである。

特殊な例ではあるが、文字を連ねて絵を描いてゆく「文字絵」（図2『法華経宝塔曼荼羅図』）でも、当時は水平方向を描くのに横倒しになつた縦書きをもちいていた。これもまだ横書きがなかつたからにはかならない。

やないけ・まこと
慶應義塾大学文学部教授。1957年、東京都生まれ。1985年、東京大学大学院博士課程中退。昭和女子大学専任講師、大阪女子大学専任講師、東京女子大学助教授、同教授を経て現職。専門は日本語学。おもな著書に『横書き登場——日本語表記の近代』（岩波新書）、共著に『上方ごとばの今昔』（和泉書院）などがある。

文字を理解するために必要不可欠な文字配列方向（書字方向）

縦書き、横書きのように、文字を並べ／読んでゆく方向を「文字配列方向（書字方向）」といふ。われわれの言語は、口や喉を使ってつくり出される音声をもちいているが、この音声器官はラッパ（金管楽器）のようなしくみで音を出すため、複数の音を同時に発することができず、言語は音が時間の順に一列に並ぶというかたちをとらざるえない。

しかし、言語はこの制約を逆手にとって、この「順序」の効果を最大限利用している。akiとkaiとikaはみな同じ音の組み合わせでできているのに、それぞれ別の意味を表しているし、文の順を逆にしても「大洪水がおきた。ダムが決壊した」と「ダムが決壊した。大洪水がおきた」では、因果関係がまったく逆になつてしまふ。音声言語の場合は、聞こえてくる音の順がそのままの順序になるので、聞き取つてさえいけばそれで言語として理解できるのだが、文字を読む場合は、すでに書かれて平面上にある文字を目にすることができほとんどである。

われわれのすぐれた視覚は書かれた文字を一遍見て取ることもできるが、それでは言語として理解できない。読む人が一定の順序で文字をスキヤニングし、順次読み取つてゆくという積極的な行為により時間の流れをつくり出して初めて、言語の順序性が復元され、理解が可能になるのである。その読み取りの順序を伝える方法のなかで一番簡単なのが、文字をあらかじめ一列に並べておいて、読み取りの起点とそこからの進行方向とを社会的に約束しておくことなのである。これが

「文字配列方向（書字方向）」という規則である。文字・表記にとつて最重要の規則だから、これを安易に変更することはできない。世界の言語がひとつの方に向に固執しているのはそのためなのである。

縦書き専用だった日本語が、縦・横両用になつたということはどれほど稀有なことなのか、おわかりいただけただろう。

西欧語との出会いによるさまざまな試みと葛藤

日本語が横書きできるようになったのも、日本語自身の自律的で自然な変化によるものだつたわけではない。近世末期からの、左横書きする西欧語との出会いという、言語外の要因によつて生じた変化だつたのである。

西欧の文化・学問・技術などが学ぶに値しないものなら、この出会いも出会いだけで終わつただろが、産業革命後の科学・技術や国民国家とう国制、市民革命を経ての合理思想などは当時の日本にとって大いに学ぶべきものだつたから、まず、それらの勉学の基礎となる西欧語学習の場で、左横書きする西欧語と縦書きする日本語をどう共生させればよいかが問題になつたのである。

外国語より、日本語の訳語や説明の方が多くを占める単語集のようなものでは、縦書きの日本語に合わせるために左横書きの西欧語を右へ90度横転させればよかつたが（29頁図3『改正増補蛮語譜』1857年刊）、本格的な対訳辞書では西欧語は見出しひのみならず例文などにも多くもちいられるので、むしろ西欧語の方を主体としてあつかう必要がある。訳語の日本語は、狭い欄に小さな字で押し込

へ90度横転させて外国語の方向に合わせたり(図

5『ズーフ・ハルマ』写本(『道説法児馬』) 1833年完成)

さまざまな試みが行われたが、いずれも従来の縦書きを保つたまでの工夫であり、西欧語にそろえて日本語を左横書きで書いてしまうことにはなかなか踏み切れなかつた。まったく新しい文字配列方向を導入することにはそれほど大きな抵抗があつたのである。

洋学者のコミュニティのなかでさきやかに使用される時期を経て、一般向けの書物に左横書きの日本語が現れるようになるのは、かなり遅れて明治になってからのことであつた(図6『浅解英和辞林』1871年刊)。ここで生まれた日本語の横書きは、西欧語そのままの、見出しのような短いものも本文のような長大なものもすべて左横書きで書くといふものだつたが、まだこうした本格的な左横書きは、当時は、ごく限られた場で、すなわち、人でいえば、洋風の教育を受けることができた少数のエリート集団、用途でいえば、左横書きされる西欧起源の文字や記号(数式や樂譜など)とともにもちいる場合に限られて使われたにすぎない。在來の日本語の縦書きは行移りの方向も右から左へだから、左横書きの「左から」という方向性とは何の接点もない。日本語の側に、何の素地もなく、受け入れる必然性もない、まったく異なるあたりが容易に受け入れられるものではなかつたのは当然といえるだろう。

庶民の好奇心が生んだ

西欧語にはない「右横書き」

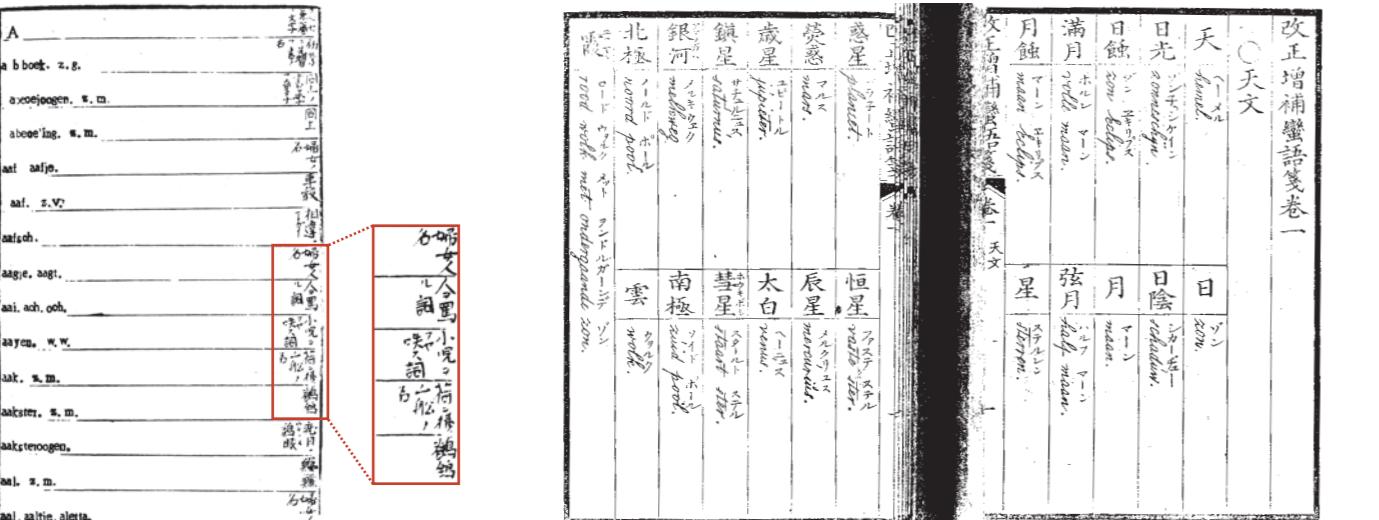


図4:江戸時代の蘭和辞典
『波留麻和解』

写本 寛政8(1796)年成立

日本最初の本格的な蘭和辞典。左側のオランダ語に対し、右側の日本語の訳語は、左へ行移りする縦書きのまま小さな文字で詰め込まれている。
所蔵/東京大学総合図書館

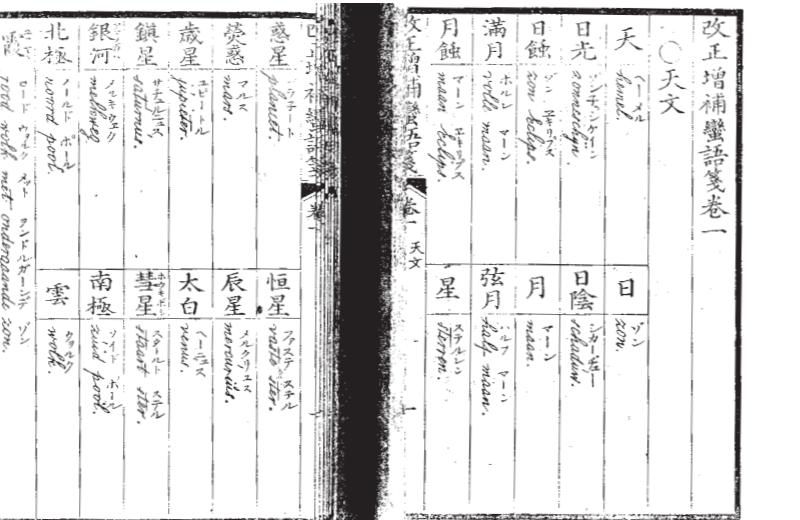


図3:『改正増補 蛮語箋』

安政4(1857)年刊

(大阪府立大学図書館『日本蘭学英学資料』コレクションより抜粋)
江戸後期から幕末にかけて刊行された意義分類体の日本語・西洋語対訳単語集。基本となる日本語にオランダ語を対訳させているが、横書きのオランダ語を90度倒し縦にして、読み仮名を縦書きに配している。

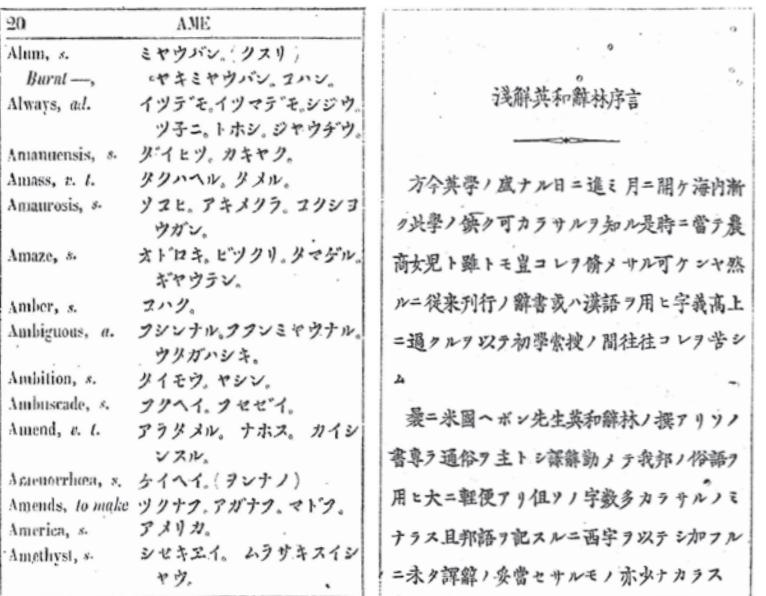


図6:最初に公刊された左横書き『浅解英和辞林』

明治4(1871)年刊

左横書きで最初に出版された語学書だが、内容的にはヘボン式ローマ字で名高いヘボン編の和英辞典『和英語林集成』などの焼き直しのようなものだった。序言を書いた内田晋斎は、当時文部省編纂寮の役人だった。
所蔵/国立国会図書館

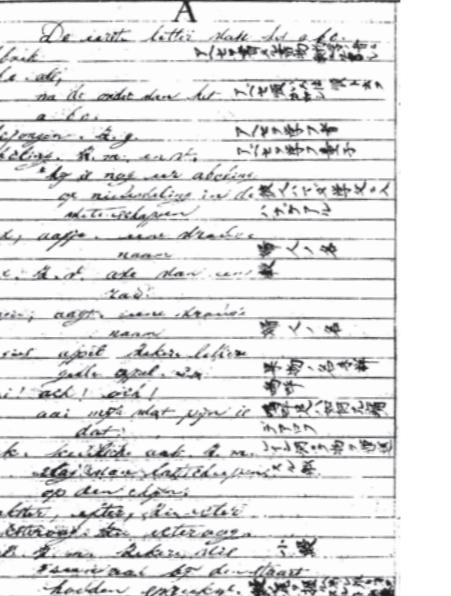


図5:江戸時代の蘭和辞典『ズーフ・ハルマ』

写本(『道説法児馬』) 天保4(1833)年完成
図4の『波留麻和解』と並ぶ、江戸時代蘭和辞典の二大系統の祖となる辞書。歐語との共存をはかり登場した新しい書字方向「横転縦書き」で書かれている。
所蔵/静嘉堂文庫

「縦書き」「右横書き」併用から さらに「左横書き」も受け入れ現代へ

江戸時代のおわりには、外国では文字を横に書くことがあるということは庶民に至るまで広く知られていたし、すでに「横文字」ということばも存在していた。本来連綿しないはずの一行一字の縦書きを連綿させて西欧語の筆記体をまねしてみたり、縦書きを横転させて横書きのよう

このいわば「鬼っ子」が生み出されたのは、言語外の要因と言語側の要因が複合して働いたからである。外部の要因というのは、鎖国時代の庶民が抱いた異国への好奇心である。そうした庶民の好奇心にこたえるかたちで、エキゾティックが流行となり、浮世絵の世界などでは、その意匠として、遠近法をもちいた描写などと並んで、絵のなかに横文字をまねて記すことが行われたのである。

江戸時代のおわりには、外国では文字を横に書くことがあるということは庶民に至るまで広く知られていたし、すでに「横文字」ということばも存在していた。本来連綿しないはずの一

に見せかけたり(30頁図7 葛飾北斎『たかはしのふじ』)、いろいろ新奇な試みが行われるなかで、開国を機に始まった再度の異国趣味流行の時期に、日本語の文字を横に並べることが行われるようになったのである(30頁図8 歌川貞秀『西墨利迦レル波爾尼亞港出帆之圖』1862年)。

しかし、当時の一般の庶民は、本格的に西欧語を学ぶ機会はなかつたから、西欧語の横書きが左から書かれるものとは知るよしもない。そこで、よく見知っていて、横書きと見かけが似ている、古くからの一行一字の縦書きにならつて右から左へ文字を並べ、右横書きを生み出したのである。これなら、初めて見る人も容易に読むことができる。右横書きを生み出したふたつの要因のうち、古くからの一行一字の縦書きというものの存在なのである。

ただ、こうした新しいもの好きの流行などは長続きするものではない。その後、改めてこの右横書きが広く定着するに至つたのは、明治の新時代になり、時の政府が通貨や交通・通信など近代国家の骨格となる制度を欧米にならつて導入した際、そのハード面もソフト面も丸のまま継受したことが大きく関わっている。貨幣(30頁図9 新貨条例による二十円金貨 1871年)、鉄道切符(30頁図10 最初期の乗車券 1871年)、郵便切手(30頁図11 皇室郵便交換条約に基づく外国郵便切手 1875年)などは、製造方法や大きさだけでなく、横書きの書式まで西欧式そのままに取り入れられたからである。ただ、これらは、制度は国民みなが利用するものだから、エリー

けではない。

最近ではほとんど見かけなくなつたが、日本語には左横書きだけでなく、右から左へ進む横書き(以下、「右横書き」とよぶ)もあつた。西欧語には右横書きはないから、これはそこから取り入れたものではないし、もちろん縦書き専用時代の日本語にも存在していなかつた(先に述べた日本に古くからある一行一字の縦書きと異なり、右横書きは二行以上になつても横に書かれてゆく)。アラビア語やヘブライ語は右横書きされるが、これらの言語はもちらん当時の日本語とは無関係である。

興味深いことに、この日本語の右横書きも、左横書きとほぼ同時代に、同じように西欧語の横書きとの接触によって生じたものなのである。西欧語にならつた左横書きを生み出したばかりか、左横書き・縦書きどちらとも似つかない第3のタイプ、右横書きをも生み出していたわけである。

このいわば「鬼っ子」が生み出されたのは、言語外の要因と言語側の要因が複合して働いたからである。外部の要因というのは、鎖国時代の庶民が抱いた異国への好奇心である。そうした庶民の好奇心にこたえるかたちで、エキゾティックが流行となり、浮世絵の世界などでは、その意匠として、遠近法をもちいた描写などと並んで、横書き・縦書きどちらとも似つかない第3のタイプ、右横書きをも生み出していたわけである。

このいわば「鬼っ子」が生み出されたのは、言語外の要因と言語側の要因が複合して働いたからである。外部の要因というのは、鎖国時代の庶民が抱いた異国への好奇心である。そうした庶民の好奇心にこたえるかたちで、エキゾティックが流行となり、浮世絵の世界などでは、その意匠として、遠近法をもちいた描写などと並んで、横書き・縦書きどちらとも似つかない第3のタイプ、右横書きをも生み出していたわけである。

に見せかけたり(30頁図7 葛飾北斎『たかはしのふじ』)、いろいろ新奇な試みが行われる

なかで、開国を機に始まった再度の異国趣味流行の時期に、日本語の文字を横に並べることが行われるようになったのである(30頁図8 歌川貞秀『西墨利迦レル波爾尼亞港出帆之圖』1862年)。

しかし、当時の一般の庶民は、本格的に西欧語を学ぶ機会はなかつたから、西欧語の横書きが左から書かれるものとは知るよしもない。そこで、よく見知っていて、横書きと見かけが似ている、古くからの一行一字の縦書きにならつて右から左へ文字を並べ、右横書きを生み出したのである。これなら、初めて見る人も容易に読むことができる。右横書きを生み出したふたつの要因のうち、古くからの一行一字の縦書きというものの存在なのである。

ただ、こうした新しいもの好きの流行などは長

続きするものではない。その後、改めてこの右横書きが広く定着するに至つたのは、明治の新時代になり、時の政府が通貨や交通・通信など近代國家の骨格となる制度を欧米にならつて導入した際、そのハード面もソフト面も丸のまま継受したこと

が大きく関わっている。貨幣(30頁図9 新貨条例によ

る二十円金貨 1871年)、鉄道切符(30頁図10 最初期の乗

車券 1871年)、郵便切手(30頁図11 皇室郵便交換条約に

基づく外国郵便切手 1875年)などは、製造方法や大きさだけでなく、横書きの書式まで西欧式そのままに取り入れられたからである。ただ、これらは、制度は国民みなが利用するものだから、エリー

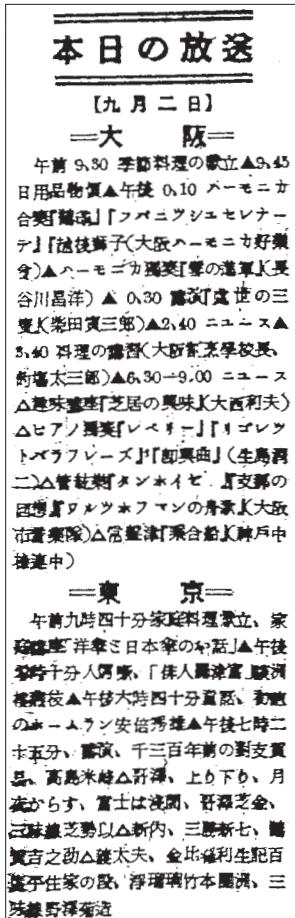


図12:『大阪朝日新聞』1925年9月2日
大正末期から昭和初期、1920年代には、新聞記事にも「左横書き専用スタイル」が進出。見出しだけなく記事も横書きだが、同じページで他の記事は「縦書き（右横書き併用）スタイル」で書かれていた。天気予報やラジオ欄などが左横書きになり、ジャンルによってスタイルを使い分けているようだ。



図13:『神戸新聞』1928年1月1日朝刊
神戸新聞では、1928年1月から29年2月まで、見出しやキャプションを左横書きにし、本文を縦書きにした「縦書き（左横書き併用）スタイル」（ただし、欄外の題号や発行日などは右横書きのまま）を採用している。このような折衷スタイルを全面的に採用する新聞記事は、この時期ではまだ稀だった。

トしか読めない左横書きでは困る。みなが読める方向として参照されたのは、やはり一行一字の縦書きだったので、これらにも右横書きが採用されることになったのである。ここでもやはり内部要因と新たな外部要因の双方が働いたわけである。さて、この右横書きは、左横書きとは異なり、ほとんど抵抗なく、広く各層に急速に普及していった。それを可能にしたのも、日本語の側の内部事情であった。従来からの縦書きは横長のスペースで使うには向きであり、そうした用途に向く文字配列方向が求められていたのである。右横書きはちょうどうまくそこにはまり、縦書きを補完し、縦書きとともにひとつシステムをなすものとして受け入れられたのであった。右横書きは、左横書きのようにそれだけすべての用途に格は右横書きではなく、縦書きと共に存して、縦書きの苦手とする横長見出しや図版キャプションなどを分担するものであり、この性格は左横書きが衰退するまでどう変わることなかつた。もともと縦書きが存在しない西欧語の横書きには当然こうした役割はなかつたのだが

ら、縦書きを補完するこのようありかたは、日本語の右横書きが初めてその道を拓いたものといえる。
一方、左横書きの方はというと、その後も西歐的知識の有用性は高まるばかりであつたから、大正時代以後、教育の充実・普及に伴つて、使用者の面でも、左横書きに触れる機会をもつ国民が増え、用途の面でも、左から書かれる文字や記号と併用される場合に限らず、科学・技術や欧米文化に結びつくイメージのある用途には広くもちいられるようになってきていた（図12『大阪朝日新聞』1925年9月2日）。こうした外部事情の変化によつて、これまで地味な存在であつた左横書き専用と同様の方式も、いつのまにか縦書き・右横書き併用という主流の方式に十分拮抗できる勢力に育つてきつたのである。

とはいゝ、このふたつの方式はそれぞれ異なる用途を分担していたから、当時は同じ新聞の同じ紙面で、左横書きと右横書きという、方向がまったく逆の横書きが併存していても違和感なく受け入れられていた。

しかし、昭和に入る頃から、次第に、同じ紙面に同じ横書きで向きが逆のものが併存するのは不自然ととらえる傾向も現れてくるようになる。縦書きを補完する見出しやキャプションなどでも左横書きをもちいるもの（図13『神戸新聞』1928年1月1日朝刊）と、従来からの右横書きをもちいるものとがぶつかりあうことになつたわけだが、戦前の中横書き・右横書き入り乱れての混乱や、戦時には、右横書きを一行一字の縦書きと混同して日本伝統の方式ととらえた国粹主義者が、欧米イメージと結びついた左横書き排除に動くなどの糾余曲折を経て、現在では左横書きにほぼ統一されるに至つている。

現在の日本語の左横書きは、このような経緯で、縦書きの文章とも一緒に使え、レイアウト、デザイン上の自由度がきわめて大きいといつていい。左横書きだけで使う西欧のものとは大きく異なるものになつていて。

異質なものとの出会いのなかから生まれた「鬼っ子」、右横書きは短命であつたが、しっかりと貴重な遺産を今に遺しているのである。

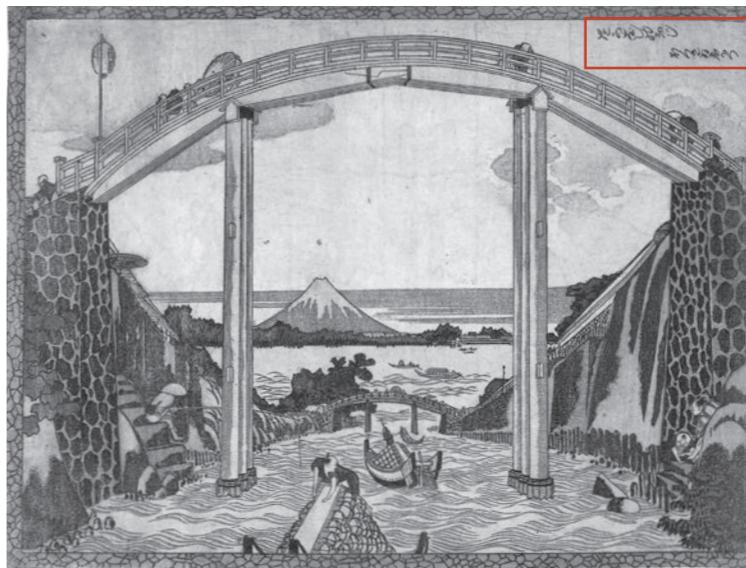


図7:葛飾北斎『たかはしのふじ』
文化前期（1804～11）頃
銅版画風のタッチと極端な遠近法で洋風をアピールした作品には、絵の題と署名「ほくさんゑかく（北斎描く）」の縦書きを横転させ、欧字の筆記体をまねてつけ書きをしている。所蔵／房総浮世絵美術館



図8:歌川貞秀『亞墨利迦洲迦爾波尼亞港出帆之圖』
あめりかしうかるほるにあみとしきばんのづ
文久2（1862）年
開国による異国趣味の影響が顕著に見られる横浜浮世絵。
題名が右横書きで2行で記されている。
所蔵／神奈川県立歴史博物館



図11:皇米郵便交換条約に基づく外国郵便切手

近代郵便は明治4（1871）年に創業されたが、当時は金額が縦書きで入っているだけのものだった。横書きになつたのは、明治7（1874）年公布の「皇米郵便交換条約」実施の翌年、十二銭・十五銭・四十五銭の外国郵便切手からだつた。

図10:日本の鉄道創業時の一等片道乗車券
鉄道創業に向けイギリスの援助や指導を多く受けたため、明治4（1871）年の最初期の乗車券には、表面に日本語と英語、裏面は英仏独の3か国語が横書きで表示されている。
所蔵／天理大学附属天理参考館



図9:日本の近代貨幣の第一号、二十円金貨
明治4（1871）年に発行されたが、西欧式にならない横書きで額面・国名・発行年が表示がされている。